

聖マリア国際協力ニュース

第97号

平成20年9月1日発行

インドネシア国タムリンググループとの相互研修協定

国際協力部 高岡宣子



ORでアドバイスを高松副院長

聖マリア病院職員とM.H. Thamrin Health Care Group (以下、タムリンググループ) 職員の相互研修(The Exchange Program for Capacity Development of Health Staff) に関する覚書(Memorandum of Understanding)の締結および第一回目の研修に関わる意見交換のために、8月3～6日インドネシアのジャカルタに、高松副院長と出張しました。

当院は、2006年5月に起きたインドネシアジャワ島中部地震の際に、医療NPO法人HuMA(Humanitarian Medical Assistance)およびNPO法人ISAPHと合同医療チームを形成し、第一次派遣チームに浦部大策先生、坂西信平先生、仁田原重政看護師が参加されました。その際に、被災地での医療活動を協力して行ったのがタムリンググループの医療チームでした。タムリンググループのCEOである、Dr. Abdul Radjak氏はタムリンググループのグローバル化を目指し、グローバル化を加速させるためには海外の医療施設との提携が重要とのお考えでした。そこで白羽の矢が立ったのが当院です。2006年11月には早速当院を視察され、その後、当院からも調査団を2回派遣し、協議を重ねた結果、今回の相互研修協定の締結に至りました。

さて、締結した相互研修の目的ですが、これは当院とタムリンググループとは異なります。当院の研修目的は「異文化や異なった保健医療体制などの体験と理解」および「問題解決型思考の促進」ですが、タムリンググループ側の目的は、医療・看護サービスおよびマネジメントの質向上で、以下の6つの分野での研修を予定しています。1) ICU、2) 手術部、3) 病院管理、4) 放射線科、5) 医療機器管理、6) Infection Control。

当院の第一回目のスタディ・ツアーは10月下旬派遣、タムリンググループからの第一回目の派遣は12月を予定しています。当院の研修者は、タムリンググループの病院の状況を把握し、タムリンググループからの研修生が来院した際には、タムリンググループの病院への具体的な改善策を提示するなど、タムリンググループの質の向上に資するための、実践的なアドバイスをすることが期待されています。



署名後の記念撮影

聖マリア病院での研修と国際協力への夢

私はハンガリーの南部にあるセグド大学に在学しています。ハンガリーの医学部にはハンガリー語コース、英語コース、ドイツ語コースの3つがあります。私は小さい頃から海外での医療活動に興味があり、色々な国の人と英語で医学を学べる英語コースを選択しました。この大学には欧州、中東を中心にアジア、アメリカ、アフリカから学生が集まっています。英語と言う共通の言語を通して、価値観の違い、文化の違いがある中、医学を学んでいます。



聖母病棟で研修中の諸隈さん

セグド大学のカリキュラムの一つとして1年生終了時に4週間の看護研修を受けることを義務付けられています。研修場所はハンガリーだけではなく、大学が指定しているタスクを満たすことのできる病院であればど

こでも研修を受けることが認められています。しかし1年生を終了したばかりの私は何の資格もなく、英語も力不足は否めず、日本の方が勉強できると思い、日本での研修を選択しました。今回事情を考慮して、私の研修を受け入れてくださった貴院に感謝致します。貴院での研修は、私にとって初めてのことでばかりでした。多くの医療スタッフの方々に援助、ご指導を戴きました。実際の医療現場の厳しさ、難しさに触れ、医療に関わる仕事のやりがいを感じる事が出来ました。また研修の中で貴院が国際協力に熱心に取り組んでいる病院だと知り、大いに刺激を受けました。私も将来は国際保健医療の分野で活躍できるような人材になればと思います。卒業までの道は長く険しいですが、ハンガリーで頑張る気持ちを新たにしています。

最後に聖マリア病院の今後の発展と、ER、ICU、循環器病棟、および聖母病棟のスタッフの皆さんのご活躍とご健康をお祈り致します。本当にありがとうございました。



ハンガリー国立セグド大学医学部 諸隈静

ISAPH Laos での活動を終えて

ISAPH 篠原久美子



栄養失調で病院に運ばれた赤ちゃん

村落部の女性が安全に出産し、健康な子供を育てられることを目的としている。

ラオスでは妊娠しても妊産婦健診を受ける事も無く、自宅でお産し独自の習慣を信じて育児をしている事が多い。その習慣には現代の日本に住む私達にしてみれば信じられないような習慣もある。例をあげると、母親は出産後一週間もち米と塩、それと大鍋5～6杯の木を煎じたお茶以外のものを口にはいけない。それ以降は家庭によって異なるが、大体において3ヶ月間は食べてはいけないという食材が多く、野菜・肉・果物をほとんど食べず、結果栄養状態が悪くなる。そのような母親の母乳を飲む赤ちゃんもやはり栄養バランスが偏り突然死する事がある。赤ちゃんがお腹をすかせて泣いていれば、もち米をドロドロな状態に蒸したものを口にどんどん押し込み食べさせる事もよくある。

ラオスの都市部では、テレビや新聞、医療機関が行っている妊産婦のための健康教育を見聞きする機会も多く、それらの習慣は徐々になくなってきており、子供も健康に成長しているが、教育を受ける機会がない村落部ではまだまだ乳児死亡率が高いのが現状だ。

ISAPH Laos ではそのような教育を受ける機会が少ない村落部を月に1回地元の保健員と共に巡回し、子供の身体測定をする事で栄養状態を観察したり、妊産婦健診を無料で行い生活指導や育児指導を行っている。

そのような、私の前任者が死亡した乳児の多くに同

様の症状があることに気が付いた。その後多くの専門家の方々の助言や協力を得て、死亡原因にビタミンB1欠乏の可能性があるのではないかと言うことが分かった。その調査の段階で母親の血中ビタミンB1が極端に低かった母親の家庭訪問を行ったところ、ガリガリに痩せた赤ちゃんが泣く元気も無く寝ていた。近所の村人もあの子はあと2～3日で死んじゃうねと噂していた。本来援助団体は個人を支援する機関ではないが、放っておく事もできず病院で点滴を受けさせ母親にビタミンや鉄分などのサプリメントを与え、育児方法も何度も説明した。

あれから1年以上がたった。その赤ちゃんは今ブクブクとした足で元気に歩きまわり笑っている。その家族も私達が村へ行くたびに赤ちゃんを連れて会いに来てくれる。お母さんは次に妊娠したとしても正しい食習慣と育児方法で元気な子供を育てるだろう。

私は2008年7月で任期を終了し、現在後任者が活動を支えている。古くからの習慣を変えるというのはとても難しく長い時間を要する作業であるが、多くの方々の協力で少しずつ私達の活動は成果を挙げてきていると感じる。



その後栄養失調から回復し成長した赤ちゃん

お知らせ

すでにご案内を差し上げておりますが、インドネシアおよびラオスへのスタディ・ツアーを下記の日程で実施いたします。参加希望の方は9月3日(水)迄に所定の申請用紙を国際協力部までご提出ください。

尚、ご不明な点は国際協力部(内線2385)までお問い合わせ下さい。

- 1) インドネシア国スタディ・ツアー
日程：10月20日(月)～10月26日(日)
- 2) ラオス国スタディ・ツアー
日程：11月17日(月)～11月22日(土)

※募集人員は各ツアーとも4名。
(看護職より2名、その他職種より2名)
※9月8日(月)午後または9日(火)に面接試験を実施予定しています。



今月の動き



【研修受入】

- ・9月22日(月)～11月14日(金)
JICA 集団研修「病院経営・財務管理」コース。
研修員11名のほか、韓国カトリック医療協会より1名がオブザーバー参加。

【派遣】

- ・9月5日(金)
磯東一郎(東京連絡事務所)、ポリビア・地域保健システム向上プロジェクトの任期終了につき帰国。
- ・9月14日(日)～10月5日(日)
山崎裕章(国際協力部)、厚労省国際医療協力委託研究事業の共同研究作業のため、ベトナム国ハノイ市へ出張。